

目的 今日のごみ問題においては、都市化に伴う埋め立て地確保の限界、焼却工場の効率性や立地の困難性など、ごみ処理上の問題が主に議論されている。ごみ問題は、生活のあり方と深く結びついているはずであるが、生活システムとの関連の議論はあまりにも少ない。そこで本研究では、生活者がごみを家庭内にためて排出するまでの実態とその意識について調査し、ごみ問題と生活システムのあり方について考察していくことを目的とする。

方法 ごみの高度分別実験を昭和61年度から開始した首都圏内のH市の住民を対象に訪問留置法によるアンケート調査を実施した。調査地区：ごみ高度分別実験地区（モデル地区）と非実験地区（非モデル地区）から、集合住宅地、商業地区、旧住宅地、新興住宅地を各々抽出した。調査期間：昭和62年9月12日～21日。有効回収数：モデル地区1,147票、非モデル地区691票、計1,838票。

結果 ①生ごみ、可燃ごみのため方については、モデル地区と非モデル地区の差はなかった。②資源ごみをためておく場所は、ごみの種類によって屋内と屋外に区分される。住宅形式と住宅面積によっても、ごみをためる場所は異なる。集合住宅居住者はほとんどがベランダをごみ置き場として使用し、狭さに対する不満の声が多い。③可燃ごみの排出方法についてはモデル地区と非モデル地区の差はない。衣服・古新聞等の有償ごみについては年齢、家族形態で排出方法に差がみられた。④ごみ集積所の配置については、集積所がきれいに清掃されていて嫌悪感をもつ人が多い。